

平成29年度
地球環境『自然学』講座
第11回

テーマ

「南三陸町における森里海連環の取り組み」

講師

大正大学 人間学部 人間環境学科 准教授

山内 明美 先生

平成29年9月23日

認定NPO法人・シニア自然大学校

講師プロフィール

山内 明美 (やまうち あけみ)



出身 宮城県南三陸町

略歴

慶應義塾大学 環境情報学部卒

一橋大学大学院 言語社会研究科卒

東京大学大学院 総合文化研究科 兼任講師

現職 大正大学 人間学部 人間環境学科 准教授

専門分野 歴史社会学、農村社会学

著書

(1) 『こども東北学』 イースト・プレス, 2011.

(2) 共著『辺境からはじまる・東京／東北論』 明石書店、2012.

(3) 共著『ひとびと精神史 第3巻』 岩波書店、2015

(3) 共著『岩波講座 現代』 岩波書店、2016. など

社会貢献 NPO 東北開墾理事 「東北食べる通信」

南三陸ネイチャーセンター友の会理事

日本の東北地方をフィールドにした稲作と近代日本の社会構造を長らく研究してきた。2011年3月11日以後は、郷里の南三陸町や福島県をフィールドに文化継承の問題と風土形成、生存基盤研究に取り組んでいる。

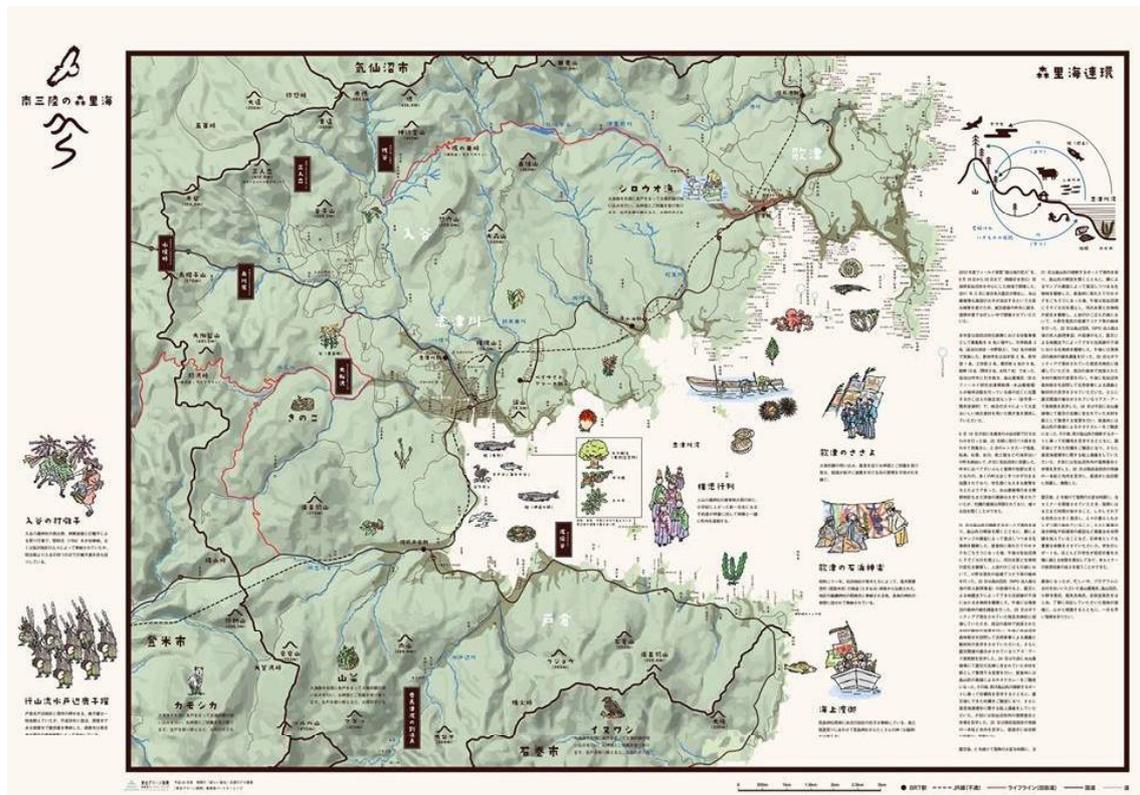
南三陸町と森里海連環学

はじめに

宮城県南三陸町は、2011年3月11日の東日本大震災の津波により町の中心部は全壊滅し、町全体でも7割被災という甚大な災害となりました。震災から6年半を迎え、来年春にはようやく仮設住宅から復興住宅への移転が完了する見込みです。

シラス式海岸の広がる三陸沿岸部は、繰り返される地震、津波、冷害（やませ）に悩まされてきた土地柄ですが、山野河海の恵みの豊かな場所でもあります。昨年の長期総合計画で、南三陸町のまちづくりの方針が「森里海ひといのちめぐるまち 南三陸」となりました。今回は、三陸沿岸部の地勢と南三陸の震災後の取り組みについてお話させていただきます。

1.南三陸の地勢と分水嶺



2. 「一切供養」-災害多発地域の自然観-

水戸辺行山流鹿踊りについて

- ・ 「奉一切有為法踊供養也」

1707年（安永4）：小泉、歌津、荒砥、長清水、十三浜、諸浜の漁船十九、漁夫283人、防風に漂流し行方知れず。

1722年（享保7）：戸倉大凶作。新町、西戸、折立等住民流浪又は餓死してほとんど全滅と伝える。

1723年（享保9）：志津川に大火。446戸焼失。

1724年（享保9）：行山流鹿躍供養塔が戸倉水戸辺に建てられる。

1725年（享保10）：水戸辺肝入、久右衛門が「水戸辺永代留帳」を書き上げる。

1730年（享保15）：宮城、本吉、牡鹿、桃生4郡に津波。

1751年（宝暦元）：本吉、桃生、牡鹿地方に津波。

1755年（宝暦5）：洪水と冷害による大凶作。

（参照 『歴史の標 志津川町誌 III』 志津川町、1991）



南三陸町戸倉字水戸辺
「奉一切有為法躍供養也」



南三陸町戸倉寺浜
「干魚の供養塔」

3. 風土形成と生存基盤調査

南三陸町歌津字弘川

- ・ 300年間10軒で存続してきた村：それでも「限界集落」と呼ぶのか？
- ・ 生存の豊かさをどの指標で計るのか？
- ・ 「農民」という形象とは何か？
単に食物を生産するだけではなく、地域をデザインしてきた人々
：文化の継承と自然資源の保全

4. 南三陸町民憲章と南三陸SDGs

山から：FSC 森林国際認証 →宮城県初

海から：ASC 養殖漁業国際認証→日本初

ラムサール湿地登録：2018年10月のドバイ会議を目指す

→持続可能な地域づくりと南三陸の世界への責任の実現

南三陸町民憲章

わたしたちは、この素晴らしい町に暮らしながら共に成長してゆくことを願ってここに、希望の姿をうたいます。

海のように広い心で 魚のようにいきいき泳ごう

山のように豊かな愛で 繭のようにみんなを包もう

空のように澄んだ瞳で 川のように命をつなごう

大きな自然の手のひらに抱かれている町 南三陸